

坂田寺跡の調査

第2図 昭和47年8月～10月

坂田寺は飛鳥寺とともに、わが国最古の寺院として知られている。明日香村大字坂田から栢森に至る県道と、坂田の集落へ通ずる旧道とが分岐する付近では、古くから礎石や古瓦が出土しており、ここが坂田寺跡と推定されている。このたび、建設省の47年度事業である祝戸国営公園の建設に伴ない、公園への進入路が推定坂田寺跡の北辺を通ることになったので、その事業に先だって道路敷地内の調査を行なった。発掘面積は約3.5aである。

発掘地区は、旧道が坂田と吉野方面とに分岐する地点である。通称「まら石」^(注1)と呼ばれている石造物の北側で、石田茂作氏推定の坂田寺門跡の北辺にあたる。付近一帯は、北方約100mを流れる飛鳥川に向かって下がる傾斜地で、かなりの高低差のある水田が作られている。調査は、旧道をはさんで東西に長いトレンチを設定して行なった。

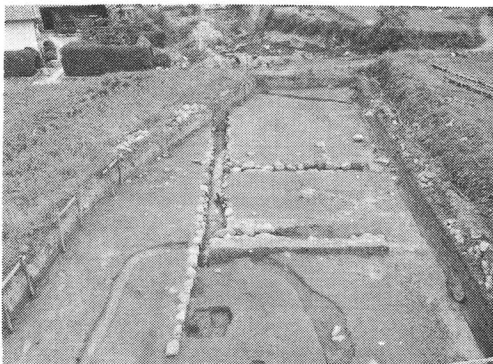
調査の結果、この地域では傾斜地を数回にわたって整地していることが判明し、池・溝・掘立柱列・建築物などが重複した状態で検出された。これらの遺構は大別して四期に分けられる。

次に、検出した各時期の遺構・遺物について概要を報告する。

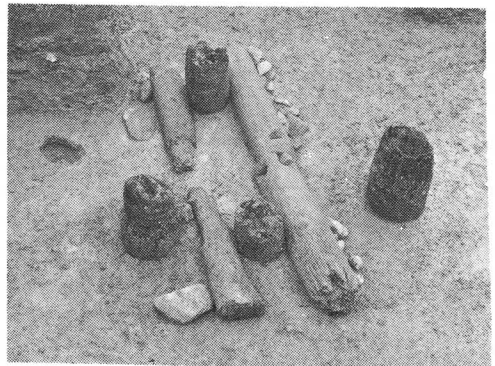
第Ⅰ期は7世紀前半にあたり、この時期の遺構には、旧道東側のAトレンチで検出した池(SG100)がある。池の北端・西端は発掘区の外になるため、全規模を明らかにすることはできなかったが、南北幅10m、東西幅6m以上で、中央部での深さは1m以上におよんでいる。東側の岸には、護岸のため、高さ約1mの石積を築いてある。

第Ⅱ期は7世紀後半にあたり、この時期の遺構には、土壇(SK080)、素掘りの溝(SD081)、土壇状の落ち込み(SX082)などがある。これらはいずれも旧道西側のBトレンチで検出した。

第Ⅲ期は8世紀前半にあたり、この時期の遺構には、溝（SD050・051）、掘立柱列（SA060・061）、建築物（SB070）、土壇（SK054）、石列（SX053）などがある。溝はBトレンチで検出した。いずれも石組みの溝で、東流する東西溝（SD050）に北流する南北溝（SD051）がT字形に合流する。東西溝は、南北溝との合流点の西約4.5mの位置から始まり、全長12m以上、内幅0.5m、深さ0.5mである。南北溝は、Bトレンチの中央南端にある石列状の遺構（SX052）の北端より始まり、全長約10m、内幅約0.5m、深さ約0.4mで、底には玉石が敷いてある。掘立柱列（SA060・061）は、Aトレンチで検出した。SA060は東西にならぶ2本の柱列で柱間は2.94mである。いずれも直径約30cmの柱根が残っていた。SA061は、この柱列の東延長線上6.2mのところから始まり、柱掘り方を2間分検出した。柱間は西から2.5m、2.0mである。SA060とSA061とは柱筋がそろっており、同一の遺構である可能性も考えられるが、両者の中間にあたる柱位置には掘り方は確認できなかった。建築物（SB070）はCトレンチで検出した。4本の柱根が一つの大きな掘り方内に建てられている。うち2本は、SA060・061と平行し、柱間は2.4m、他の2本は、この柱列に直交する形で立ち、柱間は2.4mである。東西列の柱根は直径30cm、南北列の柱根は直径60cmほどである。東西列の柱は南北列の柱より深く、その根元の両側には、東西方向に、上下に約50cmほどの間隔で二本ずつ木材を柱にそって横たえ、柱の根固めをしており、さらに、この横材の外側には石を詰めて固定してある。南北の柱は、東西の柱を立て横材を据えて埋めた段階で、掘



石組み溝 SD 050・051（西より）

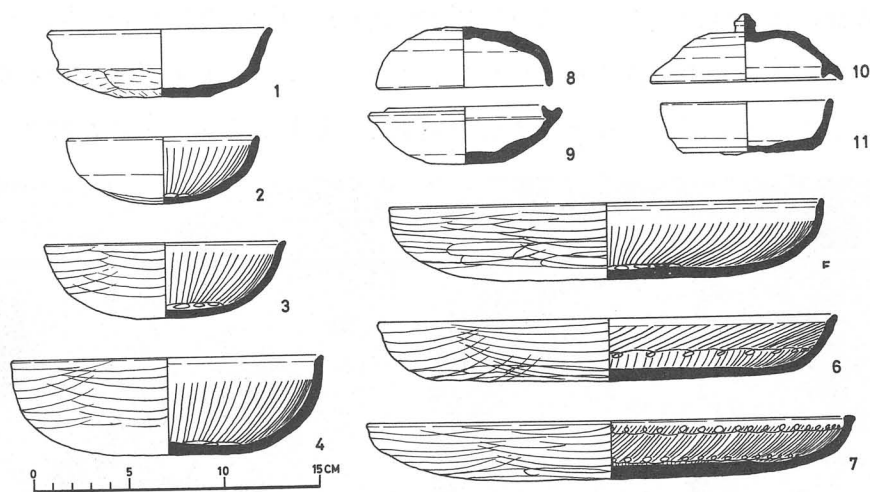


建築物 SB070（東より）

り方を掘って建てられたもので、その根元には根巻き風に石を据えてある。この建築物の性格については、南側が未発掘であるため、今後の調査を待って検討したい。Bトレンチ東南端、SB070の東西柱列の西延長線上約20mの位置でも、SB070の東西列の柱と同様に木材を根元に横たえた柱根一本(SX071)を検出した。SB070に関連するものであろうか。Bトレンチでは、ほかにも柱根や柱掘方を検出したが、性格は不明である。

第Ⅳ期は8世紀後半にあたり、この時期の遺構には、溝(SD010・012・013・016)、瓦堆積(SX020)、土壇(SK011)、石敷(SX014・015・018)などがあり、これらは第Ⅲ期の遺構の上層で検出した。溝はいずれも北流する南北溝である。SD010は内幅0.3m、深さ0.3mほどの石組み溝で、北部は素掘りの溝となり西へ折れまがっている。SD012・013は、この溝の東約5mと9.5mにあり、いずれも幅1mほどの浅い素掘りの溝である。SD012は第Ⅲ期の石組み溝で、最大幅1.3m、深さ約0.4mである。瓦堆積(SX020)は、丸瓦・平瓦が交互に組み合ったまま、反転して転落した状態で遺存していた。この状況から瓦堆積の南に建物が想定されるが、建物本体は確認できなかった。

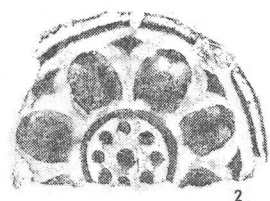
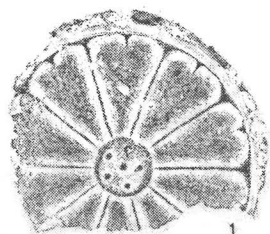
これら四期にわたる遺構のほかに、Bトレンチ下層では、古墳時代の遺物包含層のあることを確認した。



池 SG100出土土器

遺物には、土器・瓦・木簡・木製品などがある。

第Ⅰ期の遺物には、土器・瓦・木簡・木製品・金属製・骨角製品などがある。これらはすべて池（SG100）内堆積土から出土した。須恵器には各器種があるが、量は多くない。この時期の特徴をよく示す杯・蓋についてみると、口径9cmほどの内面にかえりをもつ蓋（10）とこれに組み合う杯（11）とが主体をなし、さらに、ほぼ同径で短い蓋受けの立ち上がりをもつ杯（9）とこれに組み合う蓋（8）とが少量共伴している。須恵器に比べて土師器の出土量が多い、土師器には各器種があるが、杯・皿類が主体をなしている。杯は、胎土・色調・形態からA（2・3・4）・B（1）の二つに分けられる。Aは、胎土が



池 SG100出土軒瓦

精良で赤味がかった褐色を呈し、底の丸い椀形の器形である。外面はへら磨き、内面に細かく放射状暗文・らせん状暗文を施したものが大部分を占めている。Bは、微細な砂粒を含む胎土で、淡褐色を呈し、口縁部と底部との境が明瞭で口縁が外方に屈折する器形である。底部外面は荒くへら削りしたままである。この種のものには暗文は認められない。皿は細部の形態によっていくつかに分けられる。いずれも、内面に放射状暗文・連弧状暗文・らせん状暗文を組み合わせさせて施している（5・6・7）。この時期のものとして皿が確実に共伴していることは興味深い。これら一群の土器は、当研究所による小治田宮跡推定地や雷^{（注2）}丘東方遺跡の最近の調査の成果などを考慮すると、7世紀中葉をやゝ遡る時期のものと考えられる。瓦も多量に出土した。軒瓦では、坂田寺跡出土のものとしてすでに知られている8葉の単弁蓮華文軒丸瓦（2）や、飛鳥寺創建時のものと同型式の単弁10弁蓮華文軒丸瓦（1）、手彫の忍冬唐草文軒平瓦（3）などがある。多量に出土した丸瓦・平瓦は、現在整理中であるが、全体に砂粒を含む胎土で、焼が硬く、赤褐色を呈し、格子目の叩きのあるものが多い。木簡には「十斤」と書かれた、長さ5cm前後、幅2cmの付札が3点ある。木製品には、糸巻、琴柱、曲物、横櫓、杓柄などがある。糸巻は、ほぼ完形で、平城宮跡出

土品によく似たものがある。ほかに「卍」と墨書した須恵器の杯などがある。

第Ⅱ期の遺物としては、土器・瓦・木簡がある。これらはおもに土 埴 (SK080)、溝 (SD081) から出土した。土器は藤原宮出土のものに近い型式のものである。瓦には、7世紀後半に属する単弁重弁軒丸瓦などがある。木簡は「賀年」と判読できる断片が一点出土した。

第Ⅲ期の遺物には土器・瓦・木簡がある。須恵器には杯・蓋などがある。これらは石組溝 (SD050・051) より出土した。土師器には杯・皿・高杯などがある。杯・皿には、放射状暗文・連弧状暗文・らせん状暗文の施されているものが多い。これら一群の土器は、型式的にはほぼ神亀 (724～728) 頃のものである。土器には墨書したものが多く、30数点ある。「知識」「南」「金」「真」「新」「成」「大」「和」「太」などと書かれている。木簡は二点出土したが断片で判読できない。

以上のように、遺物は遺構に伴うものが多く、とくに池 (SG100) や石組溝 (SD050・051) 出土の土器は、飛鳥地域での土器編年の基準となる良好な資料といえよう。

今回の調査で検出した遺構は、調査地が小範囲であり、また各トレンチ間ごとの遺構の関連性の把握が充分でなく、性格の判然としないものが多い。これらの遺構は付近の小字名や瓦・「卍」の墨書土器などの出土遺物からみておそらく坂田寺に関連するものと考えられる。これらのうち、掘立柱列や溝などは、寺域の北限を区画する施設の一部の可能性がある。また、Ⅰ、Ⅱ期遺構については、一定の方位を示すものがないが、Ⅲ・Ⅳ期の遺構については、方位が真東西に対して東で北に約17度ふれているものが多い。これは地形に規制された結果であろう。坂田寺の創建については、文献によれば用明2(587)年、推古14(606)年などの造寺の記事があるが、発掘調査の結果、第Ⅰ期とした池 (SG100) の出土遺物からみて、7世紀前半にはすでに坂田寺が造営されていたと考えられる。

(注) 石田皮作『飛鳥時代寺院址の研究』1936年

(注) 『奈良国立文化財研究所年報』1971年